

## 草原に降る雪

僕がもう少年とも、まだ青年とも言えない頃、そして、もう冬とも、まだ春とも言えない頃に雪が降った。

すでに春一番は吹いていて、ときおり暖かい陽射しも降り注ぐようになっていた、そんな季節だ。

その日は朝からどんより曇っていて、とても寒かった。吐く息は僕の目の前で白くなった。たしか、それは土曜日だった。学校に行かなかったからだ。

僕は自室でその冬買った無印良品の薄いベージューのセーターを着こみ、シェイクスピアの「ハムレット」を読んでいた。シェイクスピアの作品を買ったのはそれが初めてだった。

なぜハムレットか？

単にその文庫本の表紙が気に入ったからだ。セピア調の色あいで、美しい女が不敵な笑みを浮かべた男に寄り添い、男はその手にどくろを持っていた。

昼近く、ハムレットが亡霊と話をして、そのあとハムレットがマーセラスとホレイシヨーに秘密にすると剣にかけて誓え、というところで一息ついた。剣にかけて誓うというのはどういふことなのだろう、と少し考えた。なにしろ僕は剣なんて持ったことも、いや見たことすらないので。それに、それまで僕は自分の人生において、なにかを誓うという経験すらしていなかった。

ふと視線を窓に向けると、雪が降っていた。

純白ではない。灰色のような雪だ。向かいの家もかすんでいた。

僕は本を閉じ、窓を開ける。はあっと息を大きく吐くと、それはたちまち白くなって広がり、そして消えた。外はやけに静かで、隣の家のテレビの音声がかすかに聞こえるだけだった。

僕は窓から身を乗り出し、空を見上げる。それはとても不思議な光景だった。晴れの空を見上げたときのものでもなく、曇りの空を見上げたときのものでもなく、雨降りの空を見上げたときのものでもなかった。

それは、訪れ始めた春の雪だった。

すーっと落ちてゆく雪片を追って庭に目をやると、雪柳が咲いていた。  
雪柳。

その時、僕は初めてその名に気づいた。この名前をつけた人は、とても優しい人なのだろうと思った。

さわやかな若草色に純白の花びら。それはまるで、やわらかい草原に雪が降ったかのような、とても粹な花だった。そしてそこに、絵に描いたようなまでは白くない、本物の冷たい雪が降っていった。それはとても複雑な思いが行き交った胸のつまる景色だった。

草原に降る雪。

僕がもう少年とも、まだ青年とも言えない頃の話だ。

僕はもう一度、大きく息を吐く。その白い吐息は無音で降り落ちてゆく雪の間に溶けるように消えていった。僕はそれを見届けて、窓を閉めた。

あれから僕は何度も冬を越え、春を知った。だけど、今でも雪が降ると空を見上げてしまう。それは今でも、何度見ても不思議な眺めだ。そして僕は雪柳を思う。草原に降った雪のような粹な花。

あと少しすれば、桜が咲く季節がやってくる。